

A年特定16 マタイ16章13—20節

〔直訳〕

13 だが行って イエスは 地方へと カイサリアの フィリポの  
尋ねた 彼の弟子たちに 言いつつ、

「誰で 言う 人々は 人の子はあると」。

14 だが彼らは 言った、

「確かにある者たちは 洗礼者ヨハネだと、

だが他の者たちは エリヤだと、

だが別の者たちは エレミヤだと、

あるいは 預言者たちの一人だと」。

15 彼は言う 彼らに、

「だがあなたがたは 誰で私があると言う」。

16 だが答えて シモン ペトロは 言った、

「あなたは ある キリスト 生ける神の子で」。

17 だが答えて イエスは 言った 彼に、

「幸いで あなたはある、 シモン バルヨナ、

というのは 肉と血は ない 現した あなたに

そうではなく 私の父が 天にいる方が。

18 だが私も あなたに 言う 次のことを あなたは ある ペトロで、

そして その岩の上に 私は建てるだろう 私の 教会を

そして 陰府の門は ない 打ち勝つだろう それに。

19 私は与えるだろう あなたに 鍵を 天の国の、

そして 何であれ あなたが縛るなら 地の上で

あるだろう 縛られていて 天の中で、

そして 何であれ あなたが解くなら 地の上で

あるだろう 解かれていて 天の中で」。

20 そのとき 彼は指示した 弟子たちに

ようにと 誰にも彼らが言わない 次のことを

彼が ある キリストで。

〔新共同訳〕

13 イエスは、フィリポ・カイサリア地方に行ったとき、弟子たちに、「人々は、人の子のことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。14 弟子たちは言った。『洗礼者ヨハネだ』と言う人も、『エリヤだ』と言う人もいます。ほかに、『エレミヤだ』とか、『預言者の一人だ』と言う人もいます。15 イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」16 シモン・ペトロが、「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えた。17 すると、イエスはお答えになった。「シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。18 わたしも言うておく。あなたにこのことを現したのは、この岩の上にならぬ教会を建てて、陰府の力もこれに対抗できない。19 わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつなされる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」20 それから、イエスは、御自分がメシアであることをだれにも話さないように、と弟子たちに命じられた。

①構成

① 第一段落 (13―16節)

⑦ 並行箇所マルコ8章27節には「イエスは、弟子たちとフィリポ・カイサリア地方の方々の村にお出かけになった。その途中、弟子たちに、『人々はわたしのことを何者だと言っているか』と言われた」とある。13節とマルコと比べてみると、違いは三つある。

- (1) 13節は一つの文章であるが、マルコ8章27節は二つの文章からできている。
- (2) 「弟子たち」と「方々の村に」という表現がマタイにはない。
- (3) マルコでは、イエスは「わたしのことを何者だと言っているか」と尋ねているが、マタイでは「人の子のことを何者だと言っているか」と尋ねている。

これら三つの点から言えることは、マタイではマルコよりもイエスに集中しているということである。イエスに集中するために、「弟子たち」と「方々の村に」という表現を省いて、一つの文章にしている。しかも、イエスは自分を「私」と言わず、「人の子」と呼んでいる。このようにしてイエスに集中することによって、イエスが誰であるかをいっそうはっきり主張しようとしている。

④ このような強調は16節にも現れている。マルコではペトロの告白は「あなたは、メシアです」と答えるに過ぎない(八29)。しかし、マタイでは「メシア(キリスト)」だけでなく、「生ける神の子」という表現が加えられている。この表現によって、マタイでは、イエスは天から来た「神の子」であるということが強く意識されている。またマルコには人々のイエスに対する見方の中に「エレミヤ」は現れないが、マタイはこれを加えている。

② 第二段落 (17―19節)

⑦ 17―19節にあたる部分はマルコ(八27―30)やルカ(九18―21)にはない。17―19節の各節は、一行目にそれぞれの大意を述べる文章が置かれ、その後それを説明する二つの文章が対になって続いている。例えば17節では、一行目に「あなたは幸いである シモン・バルヨナ」

と大意が述べられ、その後に「肉と血はあなたに現さなかった」と「天にいる私の父が(現した)」が対になって続く。

③第三段落(20節)

⑦弟子はイエスから沈黙を指示される。イエスがメシアであることは復活の時まで伏せられなければならない。

②生ける神の子(13―16節)

②a 並行箇所マルコ8章27節と異なり、マタイではイエスは自分を「私」とは言わず、「人の子」と呼んでいる。「人の子」という表現はイエスが自分を指すときに用いる呼称であるが、ここでの「人の子」は「私」の代用ではなく、キリスト論的な称号として用いられている。「人の子」は、詩編8では、弱くはかない人間存在を表すが、黙示文学では、終わりの日に雲に乗って現れる天からの特別な存在を指して「人の子」と呼んでいる。マタイは後者の意味で「人の子」を用い、イエスは「天からの特別な人物」であると強調している。マタイが描くイエスは、地上にいるときから、すでに「人の子」である。しかし、イエスは黙示文学での世俗的な勝者としての「人の子」ではなく、この世からいったん捨てられ、殺された後に栄光を受け、人々を救う「人の子」である。

②b 「フィリポ・カイサリア」は、現在は「パニヤス」と呼ばれ、古代では「パニオン(パネアス)」と言われた町である。ヘロデ大王の子フィリポの名を付け、さらにローマ皇帝に敬意を表して、「皇帝の(カイサリア)」町と名づけられた。地中海に面したカイサリアとは別で、ヘルモン山の南斜面のヨルダン川の水源にある。この町にはバアルの神を祀った泉水洞があり、アウグストゥス皇帝を祀った神殿もあった。大きな岩とほとぼり出る清冽な水を背景として、ペトロの信仰告白とイエスの教会への約束が語られる。

②c 「人の子は誰であると人々は言うか」というイエスの問いには、「人」と「人の子」の印象深い対照が見られるが、この対照は17節では「人間(肉と血)」と「天の父」との対照となって繰り返されている。この対照が示すように、自然のままの人間には、「人の子」が誰であるかを知る力がない(一一―27参照)。知る力が与えられなければ、たとえ弟子であっても、知ることはできない。「肉と血」という表現は旧約聖書的な表現で、はかなく弱い存在としての「人間」を指し、しばしば神と対比される(1コリ一五50、ガラ一16)。

②d 領主ヘロデはイエスについて「あれは洗礼者ヨハネだ。死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている」と語っている(一四2)。マラキ3章によれば、メシアの到来に先駆けて、大預言者エリヤが再来するとされている。イエスを「エリヤ」と見る人々もいたが、イエスは洗礼者ヨハネを「現れるべきエリヤ」と呼んでいる(一一―14)。

②e 並行箇所(マコ八27―30、ルカ九18―21)とは違って、マタイだけが「エレミヤ」の名をあげる。その理由は、迫害に苦しみ抜いたエレミヤの生涯はイエスの運命を予告するものと考えられたからか、あるいは、天に昇ったエレミヤは民のために神に執り成す聖人と信じられていたからかもしれない(2マカ一五12―16、二一―9)。更に、エルサレムの破壊を予告した点で、エレミヤはイエスの先駆者であるからかもしれない。いずれにせよ、マタイはエレミヤのうちにイエスを見ている。ちなみに、マタイ2章17節以下(ヘロデによる幼児虐殺に関して)と27章9

節以下(ユダが神殿に投げ込んだ銀貨三十枚に関して)でもエレミヤの預言が引用されている。  
⑥シモン・ペトロは「あなたはキリスト、生ける神の子である」と答える。マルコ・ルカとは違つて、マタイは「生ける神の子」を加えている。11章25節以下によれば、イエスが神の子であると知ることができるのは、神がそれを啓示したときである。ユダヤ教での「神の子」は、人間の中から神が選んだメシアを指すのだろうが、マタイでは、「インマヌエル(神は我らと共に)」という称号や処女降誕の物語が示しているように、その神性が強く意識されている。「生ける神」という表現は旧約聖書の言い方を受け継いだものであるが(詩四二3、八四3、ヨシュ三10、ホセ二1)、新約聖書もこの表現を頻繁に使う(マタ二六63、使一四15、ロマ九26、2コリ三3、六16、1テモ三15、四10、黙七2、一五7)。

### ③天の国の鍵(17-19節)

① 17-19節には同じ構文が繰り返されるが、対となった文章の主要な主語は次のようになる。

17節「天にいる私の父」

18節「私(イエス)」

19節「あなた(ペトロ)」

この主語の移り変わりが17-19節の主張の流れを表している。「父なる神」が啓示し、「イエス」が教会を建て、「ペトロ」は大きな権限を受ける。また、各節には、マタイの他の箇所と共通する表現、17節「現す」、18節「岩の上に建てる」、19節「縛る」と「解く」が見られる。

② マタイが「現す(示す)」を用いるのは四回である(一〇26)。そのうち、「私の父」と一緒に使われるのは、11章25・27節と17節の三箇所であり、神の啓示との関連で用いられている。11章25-27節は、神はイエスが神の子であることを幼子たちに現し、子であるイエスが現すことを望む者は父を知る、と述べている。

③ 18節「岩の上に建てる」は、7章24節に現れ、「岩」は御言葉を指している。イエスの言葉を聞いて行おう者は、御言葉という岩の上に家を建てる賢い人であると述べられている。そこで、この箇所の「岩」も御言葉を指すという解釈がある。しかし文脈から考えれば、この「岩(ペトラ)」は明らかに前行の「ペトロ(ペトロス)」を指している。ギリシア語のペトロスは「砕けた岩・石」を意味する。ペトロスとペトラはアラム語では共に「ケファー」であるが、使い分けに意味があるなら、御言葉である「岩(ペトラ)」に従う「ペトロ(ペトロス)」を礎としてイエスは教会を建てるという意味になる。

④ 新約聖書はキリストの象徴として「礎・石」を用いている。キリストは「家を建てる者の捨てた石」(マコ二10以下)であり、キリスト者共同体の礎石である(1コリ三10)。そこから、更に、使徒や預言者も礎石とされるようになった(エフェ二20)。マタイはイエス・キリストの教会を普遍的な広がりを持つ神の民と考え、ユダヤ人のシナゴグと区別している(マタ四23、九35、一〇17、一二9、一三54、二三34など)。「陰府の門」(死や悪の力を表す)は、「私の教会」に打ち勝つことはない。

⑤ 19節「縛る(つなぐ)」と「解く」。この組み合わせは18章18節に用いられ、「縛る」は共同体の兄弟を「許さない」を意味し、「解く」は「許す」ことを意味する。「縛る」「解く」という動詞

は、ラビによって使われた一種の術語である。律法を解釈し、信者の実生活への規定や方針を読み取る場合、「縛る」が「禁じる」、「解く」が「許す」を意味した。ここでは、律法の解釈が問題ではなく、イエスの言葉と教えを解釈し、信者の具体的な生活にそれを当てはめる際の決定権をペトロは弟子の代表としてイエスから委託されている(二八18)。

#### ④誰にも話さないように(20節)

①弟子は神の呼びかけに答えた者として「教会」となる。しかし、このときはまだ教会はイエスがメシアであると語ることを禁じられる。イエスは十字架に死に、生ける神によって復活する「神の子」だからである。弟子は復活のイエスに出会った後、異教の神々を礼拝する人々を含め、すべての人をイエスの弟子とする宣教へと遣わされて行く(二八19-20)。

#### ⑤神から与えられた信仰に立つ

①フィリポ・カイサリアには異教の神や皇帝を神格化して礼拝する神殿があった。この町でイエスが誰であるかが問われる。人々はイエスを「洗礼者ヨハネ」「エリヤ」「エレミヤ」「預言者の一人」と見ている。しかし、イエスは「あなたがたは」と述べて、「私が誰であると言うのか」と弟子に問いかける。ここでの「あなたがた」は強調であり、「人々」と対比されている。弟子を代表するペトロは、イエスを「メシア、生ける神の子」と告白する。マタイでは、イエスを「生ける神の子」と呼ぶことは、イエスを神を現す存在と告白することを意味している(二一27)。

②イエスを「神の子」と告白する信仰は、「人間ではなく、神が現した」ものである。神の啓示を受けたペトロは「幸い」と祝福される。信仰告白とは、神からの啓示に対する人間の応答である(17節)。イエスの「父」である神が、イエスが神の子であることを現した。それに対して、イエスは「私も言う」と述べて、シモンを「ペトロ」と呼ぶ。イエスの宣言は、神の啓示を受けた「シモン」が、啓示に従う限りにおいて「ペトロ」であることを明らかにする。イエスはシモンを「ペトロ」と呼び、さらに「この岩の上にわたしの教会を建てる」と約束する。

③神の啓示に従う者を教会の礎とし、イエスは「わたしの教会(エックレーシア)」を建てる。「エックレーシア」というギリシア語の背景には、「エダー」というヘブライ語があり、その動詞形は「ヤアド(名指しで呼ぶ)」である。従って、神の「エダー」とは、神が「ヤアド」したものの、すなわち神が「名指しで呼んだもの」、神が「ご自分のものとして定めたもの」を意味する。神の「教会」とは「神の民」であり、「御言葉」に応答することの裏りであると言える。そして神は、忠実に応答する者に対しては、使命と権限を与える(18-19節)。

④イエスはペトロに天の国の鍵を与える。律法学者は人々に負い切れない重荷を負わせ(二三4)、天の国を「閉ざす」(二三13)、つまり天の国に鍵をかける。「閉ざす(クレイオー)」という動詞は、「鍵(クレイス)」という名詞と同根の語である。しかし、ペトロに与えられる「鍵」は人々に天の国を開く「鍵」である。

⑤イエスを「生ける神の子キリスト」と告白する信仰は神から与えられる。信仰告白には神の力が働いていることを知る者が「イエスの教会」である。「天にいる私の父があなたに現した」というイエスの言葉を心に留め、神から与えられた信仰に立つことが求められている。イエスの教会を任される者は、神の啓示によって目を開かれた者である。